

第3回わかやまの棚田・段々畑サミットを開催

平成28年9月2日（金）～3日（土）の2日間、橋本市において、「第3回わかやまの棚田・段々畑サミット」を開催しました。シンポジウムには394名の参加があり、棚田等の保全を通じた地域住民と都市住民との交流について、県内外の取り組みを学びました。

翌日は、秋晴れのもと450年以上歴史のある「芋谷（いもだに）の棚田」の散策とともに、美しい風景をバックにコンサートを開催しました。

1) 開催概要

和歌山県では「和歌山県棚田等保全連絡協議会」（※1）を中心に、棚田・段々畑の保全活動や組織間の情報交換を支援しています。

平成25年に「第19回全国棚田（千枚田）サミット」が有田川町で開催されたことを契機に、地域資源である棚田等の保全活動を発展させていくことを目的として、平成26年から「わかやまの棚田・段々畑サミット」を開催しています。

今回は、橋本市を開催地として「～棚田がつなぐ^{ひと}村人と^{ひと}街人～ ともに守る」をテーマに、シンポジウム（基調講演・パネルディスカッション）、現地見学を行いました。

【※1 県内23市町村、県土地改良事業団体連合会、県農業協同組合中央会、並びに6つの棚田保全団体で組織する協議会】

2) 9月2日（シンポジウム）

1日目は橋本市民会館において実施しました。

開会の後、“わかやまの美しい棚田・段々畑（※2）”認定証授与式を行いました。

この制度は、過疎化、高齢化の進む中山間地域において、棚田・段々畑を守っている保全団体ならびに地域を認定するもので、今年度は1地区（※3）認定し、合計9地区となりました。

今後も、基準に達した地区を認定し、耕作を続ける地域の取り組みに対する理解を促すため、活動内容等の情報を県内外に発信することで、都市住民等との交流促進による地域活性化につなげていきたいと考えています。

【※2 わかやまの美しい棚田・段々畑の基準】

- (1) 地形勾配がおおむね20分の1以上の階段状の水田または畑であり、美しい景観が保全されている地区であること。
- (2) 概ね1ha以上の団地を構成していること。
- (3) 農地の維持管理が行われており、今後も継続して行われる見込みがあること。
- (4) 地域の特徴を生かした共同の営農活動、他地域との交流活動、環境保全活動、その他の保全活動に取り組んでいる又は取り組む予定地区であること。



多くの方にご参加いただき、開会



「美しい棚田・段々畑」の認定証の授与

【※3 平成28年度認定地区 () 内は保全団体】

・有田川町 沼の棚田・段々畑 (沼の農業をまもる会)
旧清水町北部に位置する沼集落には、棚田と特産の山椒畑が広がっており、和歌山大学の学生とともにその保全に取り組んでいます。

沼の棚田・段々畑



基調講演では、NPO法人大山千枚田保存会の石田三示(いしだみつじ)理事長より「農山村の未来図～都市と農村を結ぶ活動から」と題し、東京から近い棚田という条件を生かした都市との交流による新しい農村スタイルの実践について、講演いただきました。

棚田では、水稻以外に大豆や和綿・藍を栽培し、豆腐・味噌づくりや糸紡ぎ・藍染めまで体験してもらうとともに、「家作り体験塾」として古民家再生を地元大工さんの協力により実施するなど、農山村の衣食住をプログラム化しています。



基調講演

高齢化や耕作放棄地の増加など「地域の課題の中に宝(仕事)がある」という意識を持つことにより、取り組む内容が見えてくる。活動の継続については、①毎年1つずつでも新しいことを実施し交流人口を増やす ②参加料に見合うレベルの交流内容に作り上げてリピーターを確保する(参加者の意見を取り入れ、内容をともに検討することで、運営側の人材にもなる)、③生き物観察や農村文化体験でお年寄りに活躍してもらう ことにより、人材や資金の確保につながるというアドバイスをいただきました。

引き続きパネルディスカッションでは、コーディネーターに和歌山大学食農総合研究所の岸上光克(きしがみみつよし)准教授、パネリストに石田氏、NPO里山倶楽部事務局の寺川裕子(てらかわひろこ)氏、富貴・筒香田んぼづくりタイ事務局の山本亜紀子(やまもとあきこ)氏、柱本田園自然環境保全会会長の大原一志(おおはらかずし)氏を迎え、まず各団体の活動を紹介していただきました。

里山倶楽部は、大阪府南東部の河南町を中心に平成元年から活動している市民参加型の里山保全団体の草分け的な団体で、公共事業の受託のほか薪等の生産販売、環境教育にも取り組んでおり、「好きなことをして、そこそこ儲けて、いい里山をつくる」というコンセプトを実践しています。

富貴・筒香田んぼづくりタイは、高野町の中でも奈良県境に位置する山深い筒香地区の住民を中心に、地区出身者・都市住民により平成23年に結成され、耕作放棄された水田での米作りに取り組んでおり、地元小学校の給食用米の買い取り制度が始まったことから、活動拡大に向けた体制を整えていきたいとのことでした。

柱本田園自然環境保全会は、現地見学会場である「芋谷の棚田」の保全について、20年以上前から活動していた団体と地域住民との連携を強化するため平成23年に結成され、住宅地が近いことから、親子を対象とした農業体験や生き物調査などを中心に取り組んでおり、今回のサミット開催をきっかけに、地域住民と都市住民との輪をさらに広げていきたいとのことでした。



パネルディスカッション

その後、コーディネーターの進行により、地域住民と都市住民との意識の違いによる失敗談、それを克服して現在に至った経緯や、活動を継続するための人材や資金確保等についてご意見をいただき、棚田を守ることは地域の伝統や集落そのもの、ひいては日本の農業を守ることに通じることから、保全活動によりその想いを多くの人と共有することが重要という結論を得ました。

地域は違っても、保全活動を実施する中での悩みなどは共通する部分があり、県内各地で活動している参加者に、課題解決に向けた今後の取り組みの参考になったと思われ、地域の資源を守っていくという想いをさらに強くするきっかけになったと感じています。

また、会場のロビーには、地域で棚田保全等の活動をしている団体の活動紹介や地域の農産物を使った加工品の販売ブースを設けるとともに、地域での活動のヒントとなるよう、中山間地域等直接支払制度ならびに多面的機能支払制度に取り組む組織による活動事例のパネル展示や農業・農村の持つ多面的機能に関するパンフレットの配布を行いました。



シンポジウム終了後の橋本商工会館での交流会には、119名に参加いただき、それぞれの地域の取り組みや課題等について、活発に意見交換が行われました。

また、基調講演者の石田氏とともに参加いただいた長村理事が、大山千枚田をより多くの方に知ってもらうため実施している「里舞（さとまい）」の映像を上映しました。



2) 9月3日（現地見学）

2日目は、平成26年に「わかやまの美しい棚田・段々畑」に認定された柱本地区の「芋谷の棚田」で実施しました。（参加者360名）

本棚田は芋谷川の石を利用し、室町時代に石垣を積み、水路を整備して形作られたとされ、和泉山脈の麓で源流に近いことから、清らかな水により良質な米の生産が行われてきました。

しかし近年、休耕地が見受けられるようになり、柱本田园自然環境保全会を中心とした保全活動の重要性が増しています。

現地見学前日から稲刈りが始まり、頭を垂れた稲穂とハザ掛けの風景、明治時代に造られた県内初の手掘り隧道やビオトープなど、棚田を含めた地域資源を見学していただきました。

また、当サミットで初の試みとなる棚田コンサートは、シンガーソングライターで富貴・筒香田んぼつくりタイの副会長でもあるChoji（チョージ）氏が、棚田をバックに全6曲を熱唱しました。最後の1曲は、地元柱本小学校の5年生33名と合唱し、一段と大きな歌声が芋谷全体に響き渡りました。

コンサート終了後には昼食として、芋谷米を使ったしし肉入りカレーライスが、地域の方々のご協力によりふるまわれました。



棚田を散策



手掘りトンネルの説明



ピオトープや川の開放、景観保全と油採取のために栽培しているヒマワリの種絞り体験等、子ども達に遊びを提供



コンサート会場も棚田を活用し、Choji氏と柱本小学校の生徒による「田んぼオブザワールド」の合唱で締めくくり

昼食のカレーライスも好評で、長蛇の列

5) おわりに

基調講演の中で、「農山村の人は、買い物などで都市部に行くが、都市部の人は、よほどの理由が無いと農山村には行かない」という話があり、また「橋本市に住んでいるが、近くにこんなきれいな棚田があると知らなかった」という参加者の声も聞きました。

今回のサミットを通じ、棚田や段々畑を守ることが集落そのものを守ることにつながり、集落を守るためには、村人だけではなく街人の理解と協力を得ることも重要であると再認識したことから、今後も県としては「中山間ふるさと水と土保全基金」などの活用により、地域活動を応援していきたいと考えています。